（別紙２）

日本広報協会による審査員講評

○久山町（https://www.town.hisayama.fukuoka.jp/）
【ウェブサイト　総務大臣賞・読売新聞社賞】

（ウェブサイト部門　講評）

トップページにおいてまちの理念“健康を真に実感できるまちづくり”を大きく取り上げている点は特徴的である。この理念に関連した「久山の暮らしの風景」は、まちの日常生活が伝わるコンテンツになっている。今後も継続的なコンテンツの充実を期待したい。

他の自治体とは一線を画した「健康を真に実感できるまちづくり」の一点突破とも言えるいい意味で偏った仕立て。「ひひひ」のコンテンツが魅力的だ。理念、地域、人が見える強力なコンテンツを高く評価した。ハンバーガーメニューの中に基本的なメニューは全て入れているスタイルでスマ版もPC版もできているので、トップページはとてもシンプルである。町のビジョンをトップページからダイレクトに飛べる構成になっている。

○広報ふくつ（2022年12月号）　福津市
【広報紙（市部）入選】

（広報紙部門　講評）

読み応えのある広報紙である。平和を願う企画は、いつの時代にも必要で大事なものである。ここで取り上げられているのは、それにふさわしい戦時中の父子の手紙で、とても貴重な素材である。その手紙のナマの文面を写真によって並べたのはとてもいい。まさに生々しい証拠を読者の目に訴えられるからである。今では目にする機会も少なくなった戦時中の体験記、そして当時の親子間でやり取りされた貴重な手紙を広報誌に残したということに、大きな意義を感じる特集であった。戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さがよく伝わってくる。戦時中の社会や暮らしの様子は、このように紹介してくれないと今の人たちに伝わらない。広報の三原則は「知らせる」「分らせる」「動かせる」である。この特集で「知らせる」「分らせる」まではいいだろう。問題は未来に向けてどう「動かせる」かだ。デザイン的にも、実際の写真や手紙のトーンに合わせ、落ち着いた雰囲気にまとめる工夫が、背景やフォント、配色などから伺えた。

○広報いとしま（2022 年 3 月 1 日号）　糸島市

【広報紙（市部）入選】

（広報紙部門　講評）

いわゆる「今っぽい」デザインには、若い層に表紙を開かせ、自然に読者の懐へ入る力がある。今回の応募作品の中で、最もその力を感じた紙面であった。特集ページはもとより、最後の 1 ページまで一貫してトーン＆マナーが統一されており、その完成度の高さから、楽しい、丁寧、親しみやすい、トレンドに敏感、といった、終始ポジティブな印象が糸島市のイメージにつながった。このデザイン力で、広報紙のファンを増やしてほしい。特集は、市を中心に酒造り・販売に関連する 5 者がまとまって応援するプロジェクトを紹介する記事である。こういう素材は、多くの住民にかかわるので広報にはふさわしいと思う。そのプロジェクトに関連する情報をいろいろ説明しているが、その中で、例えば、山田錦に関する情報など、ちょっとした小ネタもしこまれていて、読者も楽しんで読める。糸島市は酒米・山田錦の福岡県一の作付面積を誇っている。しかしコロナ禍などにより酒の需要が減って苦境に立たされている。そこから抜け出すには、まず苦境の状況を「知ってもらう」。次に、その原因と対応の方策を「分かってもらう」。そして次のアクションに「動いてもらう」ことである。それがうまく構成・展開されている。

○広報みやわか（2022 年 6 月号）　宮若市

【一枚写真（市部）入選】

（広報紙部門　講評）

グラウンドゴルフ大会のポスターを作成するため、モデルさんにお願いしても、ここまで自然な表情の写真を撮ることは簡単ではないだろう。カップインを喜ぶ満面の笑顔、仲間の賞賛に左手を上げたポーズ、さらにパンツと靴の色を同系色で合わせた、おしゃれな方だったことも、表紙のクオリティを支えている。カメラを構えると、慣れていない方にとっては突然の緊張感で、心から出る笑顔にはなかなか出会えない中、自然体で、笑顔が溢れる魅力的な写真だ。大会後に掲載の許可を得ていることから、参加者への配慮や誌面から「楽しさ」を伝えたいという想いも感じる。背景のグリーンも綺麗にボカして、主人公を上手に引き立て、ホールポストと共にその場の情景が目の前に広がっているようだ。写真は撮影者のどう撮りたいのかという気持ちが大切であるということが如実に表れた作品となった。写真全体から楽しさが溢れている。ポーズを撮ってもらってのいわゆる決めの写真というものは、カメラについてはあまり動かなくても良いものだが、本作品はモデル役の方に自由に動いてもらいカメラでいい表情を狙っての撮影となっており、苦労のあとがうかがえる。